21　松林桂月《潭上餘春》　一幅

大正十五年（一九二六）
絹本着色
二五一・四×八四・〇

明治中期から昭和の半ばまで、南画家として活躍した松林桂月（一八七六～一九六三）の充実期、五十歳の作品である。

山口の萩出身の桂月は、幼少期より画と漢籍詩文に親しみ、画家を志した。明治二十七年（一八九四）に、渡辺崋山から椿椿山へと継承された画風を引き継ぐ東京画壇の重鎮、野口幽谷の画塾・和楽堂に入門し、師事する。幽谷が三十一年に没した後、低迷する南画界を支える一人となった桂月は、南画とは何か、その時代にどのように南画の伝統を継承して表現していくべきなのか、という根源的な問題と対峙しながら、日本美術協会を作品発表の中心の場として自己の表現を追求していった。明治四十年に開設された政府主導の初の官展である文展で新派の勢力の拡大が如実になって以降、南画退潮の気運の中でも、桂月は大正八年に始まった帝展の審査員を務めるなど、日本画壇の重鎮として活躍し、五十歳を迎える頃には多忙を極めていた。

優れた南画表現が正当に評価されないという苦悩の時代、その中で新派の数々の作家、作品に臆することなく、むしろ挑んでいったであろうことは、大正期に入ってからの桂月の着色画の表現に精緻さと水墨表現で培った繊細な色彩表現が加わり、画面に装飾性が加味されてきた点に看取できよう。本作もその一つの代表作で、春から初夏に移ろいゆく季節を、老木、竹、藤、躑躅、野鳥（ヒガラか）の群れ、そして静かに水をたたえる淵によって、見事に表している。鉤勒填彩の技法と、没骨法を併用し、墨と染料系絵具の濃淡と丁寧に薄く賦彩した顔料によって、風情、詩情を十分に感じさせる桂月ならではの美意識が発揮されていよう。

昭和七年に帝国美術院会員、十二年には帝国芸術院会員となり、十九年には横山大観らと共に、最後となった帝室技芸員に任命され、昭和三十三年には文化勲章を受章。本来の伝統的な南画を描く最後の巨匠として、桂月の遺した足跡は再評価に値する。

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

1920s-30s モダン・エイジ ―光と影の造型美
三の丸尚蔵館展覧会図録No. 70

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　株式会社 東京美術
翻訳　黒川廣子
発行　宮内庁
平成二十七年九月十二日発行

© 2015, The Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shozokan